

# 教 仁 名 聞

第87号  
(発行日)  
2017年12月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》  
○ 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始。  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日と12日 午後3時始  
○ 〈聖典学習会〉  
毎月6日 午後7時始。  
○ 〈真宗入門講座〉  
毎月18日 午後6時30分始。  
\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 弥陀の誓願不思議

『歎異抄』第一章に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」という言葉が冒頭から出てきます。初めて読みますととりつくしまもないような言葉ですが、これが真宗の教えの基本中の基本になるのです。

人生の一切の営みはどんなことでも「生まれて死ぬ」間の事柄です。生まれて死ぬ人の全体を支えることのできるものは、生まれて死ぬ間にはないのです。経済も人間関係も肉体も生まれて死ぬ間の中のもの、生まれて死ぬという人生全体を支えることはできません。生まれて死ぬとも離れず、生まれて死ぬ人生を支えるもの、そういう真実にあうこと、それが生死を出すべき道であり仏道であります。

生まれて死ぬ間のことであるお金も健康も親族も政府も、生きる助けにはなりません。生まれて死ぬ人生全体を支えることはできません。たとえ

ばどれほど頑丈なコンクリートの家が建つても、その中の壁や床が建物全体を支えることはできません。建物全体を支えるものはゆるがぬ広大な大地であるように。

要するに、私の人生(存在)を支えてくれるものは、私の身体や私の行いの中にはなく、私に密着していながら私の外のものであり、それは無量無辺なものでなくてはなりません。

その無量無辺な善きはたらきをアマダ仏といい、無量な命と光明のはたらきであります。

この『歎異抄』のアマダ仏の「誓願不可思議」とは、人間に思い計ることのできない私たちに対する有難い誓約ということです。アマダ仏が私たちのために阿弥陀仏の全分をかけて私たちに約束を下さった、不思議な有難い誓いです。そのように誓う阿弥陀仏が現在一人一人にはたらきかけて下さり、人生全体を支える場所となつて下さるのであります。

その誓いとは「我が名を称えるばかりで助ける」との誓いです。「助ける」とは、私たちのような煩惱の塊であり仏になどは絶対になれない悪の重い者、そのような者をアマダ仏の大慈大悲の不思議なお働きだけで私たちをおさめ取り、浄土に導き、仏にして下さることです。

このような有難い働きがましましたということは不思議の中の不思議、この上ない尊いお力です。この御不思議を歴史上最初に見出されたのが、釈尊で、釈尊がこの御不思議をお説き下さったのが『仏説無量寿経』という經典です。

「そんな不思議なんかこの世にあるだろうか」と疑いますが、しかしこの世そのものが不思議に満ちているのでは

ありませんか。地球が宇宙空間を浮遊し、しかも一定の速度で回転していること、そしてその地上に私たちが振り放されずに置かれていること。太陽の光が万物を照らし育てていることも、いろんな形をしたいるとりどりの鳥がいることも、さまざまな形や色をした花が咲くことも本当に不思議です。また、音楽を聴いて美しいと感じるのも不思議です。音楽で思うのですが、音は一瞬一瞬生まれては消えていくのに、一瞬前の音は消えていながら、あるいは一瞬先の音はまだ聴いていないのに、全体がメロディとして美しく感じるのは不思議です。それは聴いている心の不思議な働きにもよるのでしょう。

また、私の存在は一つの物質体でありながら、常に自分に深く愛着し執着している。これは煩惱というのですが、

### 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (金) 午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇師

\*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

なぜこのような煩惱が人とい  
う一つの物体に離れずにつき  
まとうのか。はずべき事です  
が不思議といえは実に不思議  
です。

おぎやーと赤ちゃんが生ま  
れることもまことに神秘です  
し、人が死んで焼かれると、  
あれほど確かに生きていた人  
があつというまに骨と灰にな  
る。なんということでしょう  
か。

アメリカに長くいた人が子  
供づれで日本に帰国していた  
ときに祖父が亡くなり、火葬  
されてお骨拾いに行ったら、  
孫の小学二年生の男の子が火  
葬場の釜から出てきたお骨を  
見て「オーミラクル」と叫ん  
だといひます。小さな子供に  
とつて、今まで存在していた  
人があつという間に何という  
変わりようかと驚いたのです  
ね。大人たちはさして驚かな  
いですが、一体どちらが本当  
なのでしょう。私は子供の  
感性の方がまともだと思いま  
す。大人は長く生きています  
に何事もなれてしまつてみ  
みずしい感性が固まつて鈍  
なつてしまつて思ひます。

赤ちゃんは生まれてしばら

くするとあたりをきよるきよ  
ろ見回してはいますが、あれは  
全く未知なものに次々とであ  
つて驚いているのだと思いま  
す。まだそれを言葉に出すこ  
とができないのですが、四・  
五歳になると「あれは何？」こ  
れは何？」と大人たちを困ら  
せるほど質問をします。  
それは感性が新鮮だからでし  
よう。驚くのが本当だと思  
います。

聞いた話ですが、ギリシャ  
の有名な哲学者のプラトンが  
「もし二十歳の大人になつて、  
突然この世界に生まれたら、  
この世界を大変驚くだろう」  
といつたという話を聞いたこ  
とがあります。本当にそうだ  
と思ひます。

こうした不思議を挙げてい  
けばキリがないのですが、そ  
うした世界に人として生きて  
いる私たちがあります。その  
ような不思議だらけの世界に  
あつて、煩惱と悪業から離れ  
ない私たちにたいして、大悲  
の阿弥陀仏が「我が名を称え  
るばかりで助ける」「そのま  
まりで汝を引き受ける」と大  
慈大悲をかけて働きかけ、喚  
びかけて下さつて思ひます。  
阿弥陀仏の誓願不思議がまし  
ますこと。そういう有難い不

思議がましますといふことは、  
ありうることではないでしよ  
うか。

この有難い不思議に打たれ  
て感動し、信受し、そこに安  
らぎと喜びを感じて生きた人  
たちが歴史の上にたくさん出  
て、この不思議を讃歎されて  
きたのが浄土真宗の歴史です。  
まさにこの誓願不思議こそ私  
たちが助かる驚くべき有難い  
不思議ではありませんか。親  
鸞聖人は、

いつつの不思議をとくなかに

仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議といふことは

弥陀の弘誓になづけたり

(高僧和讃)

と詠んでおられます。五つの  
不思議の中で仏法以外の不思  
議は、多くの生き物が次々と  
生まれることとか自然現象の  
こととか、因果応報のことな  
どの不思議をいひます。そう  
した様々な不思議の中で、阿  
弥陀仏の誓願の不思議以上の  
不思議はないと讃えられてお  
られるのです。この誓願不思  
議を不思議と信じる信心が真  
宗の信心なのです。

(了)

# 七宝の宝池いさぎよく

(和讃問答)

七宝の宝池いさぎよく

八功德水みちみてり

無漏の依果不思議なり

功德蔵を帰命せよ

(浄土和讃)

現代語訳

(七宝の浴池には浄らかに八  
功德の水がたたえられている。  
煩惱のけがれのないお浄土に  
は不思議の徳がある。このよ  
うな功德を集められた仏をた  
のみとせよ)

(語句)

\*八功德水——八種のすぐれ  
た性質のある水。清浄・潤沢・  
不臭・軽・冷・軟・美・飲食  
調達・飲已無患の八種。順番  
に、清浄で透き通っている。  
無臭である。水の性質が軽く  
さわやか。冷たい。軟らかく  
て肌触りがよい。おいしい。  
飲むときにのどごしがよい。  
飲んだ後、腹痛などのわずら  
いが無い。

\*無漏——漏は煩惱のことで、  
無漏は煩惱のない清浄という

意味。

\*依果——法蔵菩薩の願行に  
依つて報われた結果としての  
浄土のこと。

\*功德蔵——法蔵菩薩の願行  
によつてあらゆる功德が成就  
し摂められている、そういう  
如来浄土の異名。

\*

D「このご和讃も阿弥陀仏の  
お浄土の功德を詠われたもの  
です。このご和讃は仏説無量  
寿経とそれをもとにして作成  
された曇鸞法師の『讃阿弥陀  
仏偈』に基づいて作られたも  
のです。(七宝の宝池いさぎよ  
く 八功德水みちみてり)は  
お浄土に宝の池があり、その  
中の水は八つのすぐれた性質  
を具えている。そのように浄  
土がいかに尊く浄らかな領域  
であるかを讃歎されたのです」  
N「浄土の功德なのです」  
D「ええ、ただこういうすぐ  
れた徳が具わつてゐるのは自  
然にそうなつてゐるといふの  
ではなく、法蔵菩薩様が私た  
ちに代わつてなされたご修行

の結果だということ、ここにも阿弥陀仏のご恩が表されているのです」

N 「宝池は現代語訳では浴池となつてますが、これはなぜですか」

D 「暑いインドの池は、体を冷やしたり洗ったりする水浴の場でもあり、飲み水を取水する場所でもあるからです」

N 「そこで水に八功德の功德があるんですね。大経に限らず經典では浄土のすぐれているすがたをなぜ宝の池や樹木や建物あるいは美しい鳥や音楽などで説かれるのでしょうか」

D 「このことについては、このような極楽浄土のすがたが説かれる場合でも、あるいは逆に地獄の苦しい有様が説かれる場合でも、その説法の対象はこの世の大衆に対して説かれているのです。説法を聴く人がそれによつて浄土がどれほど有難く尊い領域であるか、あるいは地獄の苦しみがどれほど大きなものであるかを、民衆が身近に感じることでできるように喩やイメージ言語などで工夫して説かれています」

N 「浄土に浴池が本当にあるかどうかということではなく、

そういう経説を聞くこの世の人々が浄土の有難さや功德を少しでも実感的に感じ取るためですね」

D 「ええそうです。そういう説法を聞いて自分たちも浄土に生またいとの願いを起こさせようとして説かれているのであります」

N 「それほど善き功德の満ちているところが浄土だといわれるんですね。では地獄はどうですか」

D 「地獄も同じです。非常に苦しみの大きな領域としてさまざまたとえて説かれています。地獄についての描写の一例ですが、『往生要集』には

（鉄山、上より下りて、かの罪人を打つに、砕くこと沙揣のごとし。砕けおわれればまた生じ、生じをおわばまた砕く。また十一の炎ありて、周遍して身を焼く。また獄卒、刀をもつてあまねく身分を割きて、極熱の白鐵の汁をその割ける処に入る。長久に苦を受けて年歳あることなし）

とあります。地獄に落ちた罪人に大きな鉄の山が上から落ちてきて罪人の身を粉々に砕く。するとまた身を受けて蘇りまた同じように砕かれる。そして炎によつて身を焼かれ、地獄の鬼によつて刀で身を切

り裂かれ、その傷口の割れ目に極熱の銅の液を流し込まれる。この苦を非常に長い間くりかえされる、という描写があります。こういう表現でもつて地獄がいかに苦痛に満ちたところであるかをこの世の大衆に説かれているのです」

N 「実際に地獄に落ちたらこういうことがあるというよりも、どれほどの苦痛を受けるかをこの世の事物にたとえて説かれ、それによつて私たちが悪をしないようにと警戒されるのですね」

D 「ええそうです。それと関連することですが、この世の行いによつてはまた人間界に生まれることがあり、これも前世での行いによつて、その報いがどのようなものであるかを表現する場合に、たとえば大経では前世での悪行が多いと（貧窮・下賤・乞匄・孤独・聾盲・瘡癩）などに生まれるなどと説かれています」

N 「このようにお経に説かれる意図はなんですか」

D 「それは、善を為せば樂を悪を為せば苦の報いを受けるという因果応報の道理を説き、善を勧め悪を慎むようにするために、現実世界の具体的な姿を取り上げて、大衆が想像

しやすいように説かれています。これはどこまでも善をなし、悪をなしてはならないということ、また善悪は必ず苦樂の結果をもたらすということを強調せんがために説かれたものです」

N 「しかし、こういうように現実の有様で説かれると、それを聴く私たちはついこの世の難儀な状態はその人の過去の悪業によるものと受け取ってしまうんですね」

D 「ええそうですね。經典が何を言おうとしているかを理解しないと、経説の言おうとする意図と離れて、この世の難儀な状態はその人個人の過去の悪業によるのだと思つて人を差別する事につながる恐れがあります。ですから、經典が何を言いたいかをよくわきまえて読まないで、人間を差別する縁になりかねませんので注意を要します」

N 「浄土や地獄の苦樂を人間世界の事物で表して説かれた経説は、それが何を言おうとしている教説かを正しく理解することが大事ですね」

D 「ええそうです。この世での悪行の結果が来世に聾盲・瘡癩というような身体的障害を受けるといふような経説も、

これは大衆に悪を離れさせ善を勧めるために仮に現実世界での事象でもつて業報における苦を表現されたのです。実際には貧窮・下賤・乞匄・孤独・聾盲瘡癩という状態になるのはその人の無数の縁（因縁）によつてそうなのであって、人間の過去に為した倫理的な行いの善悪だけで、現実の状況が決まるわけではないのは、いうまでもありません。縁がくれば津波で流されたり交通事故にあつたり、世界経済の変動に巻き込まれたり、あるいは出産の時の事故であつたり、伝染病に感染したりというさまざま縁でそういう状態になるのであり、人間の倫理的な過去の行為の結果のみそうなるのではありません」

N 「現在でも、悪いことをすると罰が当たるなどといって子供に悪い事をしないように言い聞かせることがよくありますね」

D 「ええ、何か具体的なことでいわないとなかなか通じないということがあつてそういう言い方をするのでですね。經典の説法も深い道理を身近な事に引き寄せて説かれる場合がありますし、また經典が説

かれた時代（二千年以上も前のインド）の時代背景の中で説かれたものあるということも考慮して読まれるべきものなのです。聴衆は迷いの深い凡夫が相手ですから、分かりやすいように方便的に説かれる場合があるのです」

N 「次に「無漏の依果不思議なり 功德蔵を帰命せよ」の無漏の依果というのは」

D 「お浄土のことです。煩惱が全く無い心、それを無漏といいます。法蔵菩薩様は無漏の心で修行をされた結果として浄土ができあがっていることを表しています。漏という意味は、内に瞋りや貪欲などの煩惱があると煩惱が外に行き現れ出るので、それはちよほど内なる毒が外に漏れ出すようなことから有漏といいます。煩惱のことです。その煩惱が少しもない心を無漏といわれるのです」

N 「では依果とは」  
D 「依果の依とは依報ということで環境・境涯のことです。安らかで浄らかな、衆生が平等に生まれ得る境涯としての浄土を開きたいという法蔵菩薩様の願とそのために行う修行の結果成就した領域が浄土だということですよ」

N 「それで浄土は私たちの思いを超えた不可思議な領域だから依果不思議といわれるのですね」

D 「ええそして、そういう法蔵菩薩のご修行の結果は無量の功德を具えた如来浄土であるから、功德蔵といわれ、その如来浄土に帰せよと仰せられるのです」 (了)

### 【住職雑感】

十一月二十八

日は宗祖の祥月命日。ご本山では報恩講ご満座の日である。二十八日の夕刻は親鸞交流センターで、竹村牧男氏と池田勇諦師の講演があり、それがネット配信されたので、視聴。居ながらにして二人に先生方の講演が聴ける。今後、こういうネット配信がもっと盛んになるのを期待する。仏教の講義が家庭のパソコンなりで聞けるようになることが今後の仏教界の課題になると思う。先年、台湾の花蓮市に慈済会という仏教団体の本部を尋ねたとき、案内してくれた女性が「今は有難いです。家の中で仏教の勉強ができます」とのことであった。実際台湾では仏教専門チャンネルが三つほどあり、その中には仏教学者が經典の講義をネットで始終配信している。日本では皆無であるが、こうした技術を仏教伝達に生かすことが更に求められよう。ただし、その内容は玉石混淆となるうから、聞か側の選択眼が問われるが。

## お便り

T・S氏からの便り

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの十一月号よりの続きです。)

\*

凡夫の方のハカライやまぬもミダにまかせられないのも何一つ関係ないのです。如来のお助けお引き受けはただただ念仏せよの「仰せだけ」「勅命」のほかは何もイラヌラシイデスヨ。(無相さんの言葉)

☆私思う。私のための本願であり念仏と知れたら(どうにもこうにもならない私のためと知れたら) 弥陀の御恩にただただ頭が下がるだけ南無阿彌陀仏と。その名号が全てを引き受けてくれるようになるなりです。私が信じる信じないという我が心に一切用事がないのです。すべては弥陀の本願念仏に成就されているのです。絶対無能のわが宿業に南無の一念するとき、弥陀の本願念仏が常に支え寄り添い守ってくれるといつてよいのでしよう。

結論するところは、何にもないの。凡夫のなりに信心も安心も何にもないままで死んでいけばいいの、生きていけばいいの。自分は自分なりの業報のままに人のまねなんかチョットもいらんの。真宗人であろうとなかろうとそんなことどうでもええのや。ただ普通の人間として生き普通の人間として死んでいけばええの。なんもいらんの。本当に気休めでない。ごく無信の普通の平凡な人として終わればいいの。・・・もう向うからの仰せだけ、向うの思いが加わったんじゃないわ。ほんならもうこれ。

☆私思う。臨終最後の無相師の御法話です。ただ「仰せ」が聞こえたら念仏称えられなくても、どのような死に方をしてもただもう「仰せ」が我々悪性の凡夫の機にかかっていること知れば何もなし。私の生き死には宿業にさしまかせて、ただ「仰せ」にハイというばかりです。

「仰せ」が本当の私の親です。「仰せ」を妨げるもの何もありません。悪も「仰せ」を妨げることはできません。善も悪も死も生もただ「仰せ」

に従うばかりです。我々は弥陀の本願よりいったんは家出をしたと、そのつもりであったが、その実相は真実は弥陀の願心南無阿彌陀仏の中にいるのです。ただ気づかなかつただけでその恵みはズクといただいていたのです。

凡夫とは浄土の中におけるがら我が業のために本願の外へはみ出していると妄想している者のことでもあります。

念仏は浄土の中にいたのだと気づかしめられることなのです。ただ弥陀の仰せが我々凡夫にかかっているとしろしめられることだけが全てなのです。我々がどう思おうと思わなくとも弥陀の仰せがこの絶対無能の我にかかっていると感じればもう普通に死んでいけばいいの、はからわなくていいの。

「ホンナラもうこれで」  
なんとという最後でしょう。  
南無阿彌陀仏

(続く)



木村無相さんの法信9

目の前の机は一つの物体ですが、そういう心を持っていませんのに。